HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「社会主義文献フォンド」小史(1887-1888) : 「人民の意志」主義と社会民主主義の狭間の亡命者群像
Author(s)	佐々木, 照央
Citation	スラヴ研究, 34, 1-26
Issue Date	1987
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5163
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113270.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「社会主義文献フォンド」小史（1887-1888）

――「人民の意志」主義と社会民主主義の狭間の亡命者群像――

佐々木　照　央

序

1887年，今を去ること百年前，ロシア最初の「党」を名のった「人民の意志」党は最後の残り火まで消失した。アレクサンドル・ウリヤーノフの「人民の意志党テロフラクション」の1887年3月1日（露暦）皇帝暗殺未遂事件は，「人民の意志」党の名称のもとに，散在する革命諸派を統一しようとする試みであった。このグループは，綱領は社会民主主義的傾向を色濃くもちながら，戦術は「人民の意志」党のテロリズムを受け継ぐ，という折衷的性格をもっていた。レーニンの兄，アレクサンドル他四名は死刑，さらにアイヌ研究の礎を築くピウスツキらは流刑され，ロシアとポーランドの後の指導者二人の兄が犠牲になった。この事件の関係者で国外に亡命しえた者達がどのような活動を続けたか，その一例を本稿で紹介しよう。日付は特にことわりのない場合は西暦である。

1887年3月1日（露暦）以前に亡命した H. A. ルデーヴィチ，O. M. ゴヴォルーヒン，以後に亡命した A. Д. グナトフスキ，そして И. B. デンボ達はスイスのチューリヒに集まり，そこで新たな活動を開始していく。チューリヒのオベルシトラセ（Oberstrasse）に「ロシア文庫」があり，その小さな図書館が彼らのたまり場であった。

本稿では今日までほとんど研究のメスが入れられていない「社会主義文献フォンド」の活動を紹介する。この組織の中心人物の一人が上記の亡命者 И. B. デンボである。デンボが指導的地位にある「社会主義文献フォンド」は，チューリヒの留学生と亡命者青年活動家から構成され，図書出版を通じて，分裂している革命諸派，特に「人民の意志」支持者と「労働解放」団派を結合しようという目的をもった。この目的は「人民の意志党テロフラクション」のものであった。本稿ではこの若き革命運動家達の活動を紹介する。

この作業によって当時の留学生や若き亡命者達が，ラヴローフ，プレハーノフ，チホミーロフなどの思想的な先駆者達といかなる関係にあったか，という問題に光をあててみたい。留学生や若き亡命者は国内の実践活動とあまり切離されていない。彼らは国内に時々帰り，国内の運動に参加する。その意味で彼らは実践の活動家とみなしてよいだろう。最近の欧米の研究では，思想史と革命運動史の間に明確な区別をする傾向がある。ラヴローフやプレハーノフなどの思想家達はロシア国内の革命運動実践者にとってあまり重要な位置を占めていない，とみる研究者がいる[1]。しかしながら，このような説には賛成し難い。弾圧の厳しい国での革命運動は，信頼できる思想的指導者を求め，その指導者から運動の正統性の保証を得ようとするものである。ナイマルクは最近の研究で1881年から1894

年にかけての期間において，思想的指導者の役割が小さい，という。筆者は全く逆に，この時期こそ，革命運動を国内で指導する「党」が崩壊しているこの時期にこそ，思想家達の役割が大きかったと考える。この混乱期には思想家からの支持をとりつけようとして，諸々の革命グループはラヴローフやプレハーノフらに接触したのである。ただし，思想家達が，活動家達の希求するような思想を提供することができたかどうかは，全く別の問題である。

I. 「社会主義文献フォンド」の形成

1. マルクス著『ヘーゲル法哲学批判・序説』のロシア語訳出版

「社会主義文献フォンド」[2] の活動の第一歩はマルクスの『ヘーゲル法哲学批判・序説』のロシア語訳をラヴローフの序文付きで出版したことである。これを出版するに至ったいきさつについては，H. H. スレプツォーヴァのラヴローフ宛書簡が最も詳しい[3]。彼女はロシア国内では「人民の意志」派の「軍人サークル」の事件（1886－87年）に連座して亡命し，スイスに住んだ。1887年の五月，彼女のグループ五名がロシア国内に非合法出版物を密輸する組織をつくった。全員が国内では「人民の意志主義者（ナロドヴォーリツィ）」を名のっていたため，結局「人民の意志主義者サークル」(кружок народовольцев) と呼称することとなった。

このサークルは禁本輸送費捻出のために，資金集めをすることが主たる仕事であった。1887年の六月，彼らは目的を「科学的社会主義に関する一連の図書出版」と定めた。そして，まず手初めにマルクスの『ヘーゲル法哲学批判・序説』とカウツキイの『カール・マルクス経済学説解説』のロシア語訳を出版することにした。この二つの文献に対してロシア国内から「恒常的な要求」があったため，という。綱領はなく，出版資金の募集という実践活動に専心していた。

彼らは最初「読書会」，研究会，原典講読，等々の学習活動で人々を集めていたが，そのうちダンスパーティを催して，第一回目に70フラン，第二回からは150～200フランというように集めていった。

1887年の七月，このサークルはラヴローフと連絡をとり，マルクスの著作の翻訳を送って，ラヴローフの序文をつけてくれるよう依頼した。

「敬愛するピョートル・ラヴローヴィチ，マルクスの論文の翻訳をお送りします。その序文を執筆して下さるとあなたは約束して下さいました。私達はそれを急いで翻訳しました。これが今の時宜にまさに適ったものでしょうから。ドイツと他の諸国の社会秩序へのこの批判に基づき，ロシアの現在の体制を解釈し，全世界史の中でのロシアの役割をさし示すには良い時期であります。そのうえ，この論文ではある国民は他の国民から学ぶべきだし学ぶことができる，というマルクスの見解が明瞭に出ています。諸国民の普遍的な歴史の道という点で非常に多くの人々がマルクスの見解を不正確に理解していることを思えば，この論文の見解を普及させることは有益であると思えます。」[4]

いわゆる初期マルクスの後進国革命像をこの『ヘーゲル法哲学批判・序説』の論理に見出して，それがロシアの発展にとって役に立つ見解とみなす，というのがこの論文の出版の理由であった。

ラヴローフは1887年10月22日付でこの「序文」を書き終えた。彼はその出版を「完全な共感をもって」歓迎すると称讃した[5]。「人民の意志主義者サークル」は革命運動の指導的思想家から支持され，その活動の有益性を保証された。ただ，ラヴローフはこの「序文」に自己のロシア革命論を盛りこんだ。このことは，サークルの意図した全ての社会主義者の結合という目的に微妙な陰を落とした。権威ある革命思想家の支持を受ける，ということの長所と短所をこのサークルは経験することとなる。

ラヴローフはマルクスの『ヘーゲル法哲学批判・序説』のロシア語訳の序文において，ロシアは自由主義社会を飛びこえて社会主義に到達しなければならない，と主張した。

「ロシアの社会主義者＝革命家にとって，マルクスのこの論文が登場した時代は現在我国がおかれている状況と多くの類似点があるように見える。ロシア専制は，＜……＞当時のフランスと比べても，又1844年のプロシャよりも，醜悪な『アナクロニズム』である。＜……＞ロシアの専制は『批判にすら値しない低劣なもの』である。＜……＞しかし，現代の世界的な関心のレヴェルに立つロシア人にとって，これが唯一の敵なのではない。今日全ヨーロッパで自覚されているのは，現代諸国家に我々が見るような形での議会主義は階級支配の道具として（身分制とはいわないまでも）社会の危険な病根である。資本主義制度の一つのあらわれとしての『階級的』議会主義というこの障害物を，〔専制から—筆者〕解放されたロシアは『飛び越え』なければならない，＜……＞」[6]

このような議会主義の「飛び越え」の主張をラヴローフは展開し，「社会主義文献フォンド」グループの最初の出発点のために贈ったのである。この「飛び越え」論は，二段階革命を主張するプレハーノフとも，また立憲制をめざすドラゴマーノフともたもとを別かつ，自由主義否定論であった。その論理的帰結として，ラヴローフはロシアのリベラル諸派との連帯をも断固拒否する立場をとった。クリャプコ＝コレツキイの，当面の共通課題「立憲」のもとに，全ての反帝政勢力を大同団結させようとする画策は，ラヴローフには到底受け入れられなかった[7]。

「社会主義文献フォンド」の設立者達はこのような厳しい路線対立を明確に認識してはいなかった。だからこそ，社会主義の旗の下に革命勢力の統一を夢見ることができた。

2. 規約の作成，「社会主義文献フォンド」の発足

ラヴローフから最初の企画を全面的に支持された「人民の意志主義者サークル」は，組織をさらに拡大して，「労働解放」団派から無党派までの諸々の留学生・亡命者サークルを糾合し，「社会主義文献フォンド」と呼称して規約を作成する。1887年10月24日，つまりラヴローフの「序文」の二日後のことである。この規約を H. H. スレプツォーヴァの手紙の中から抜粋して全訳紹介しておこう。

「社会主義文献フォンド規約[8)]

Ⅰ．文献フォンドの組織の目的は――科学的社会主義の基本的な諸命題を明らかにし，この見地から同時代の現実を照らし出すような，翻訳及びオリジナルな論文の出版であり，そこのとによって綱領の諸問題の解明に役立てることにある。

Ⅱ．フォンドの資金を構成するものは

a．会員の毎月の会費

b．舞踏会，富くじよりの集金

c．臨時会費

Ⅲ．フォンドの組織は諸々のサークルから構成され，各サークルは五名以下でないこと，サークルは自己の代議員を選出すること，その代議員達がいわゆる委員会を構成する。

委員会は自分達の中から組織の金銭部門と通信部門担当の会計係と書記を選出する。

組織全体の長には П. Л. ラヴローフが立ち，ラヴローフはフォンドの全資金を保管し，あれこれの論文の出版の必要性に関する問題において決定権を有する。

諸サークルの新たな代表者達の組織への入会は秘密投票によって決定される。

諸サークルの会員達及び代表者達の姓は秘密である。　　1887年10月24日」

この規約からうかがえるように「社会主義文献フォンド」はまず「社会主義」を共通の旗として，五名以上のサークルからの代表者達と会計係と書記によって中心の「委員会」をつくり，組織全体の「長」にラヴローフを置く。出版の決定権はラヴローフに委ねる。1887年10月24日付のラヴローフ宛の手紙の中で M. フィリッペオ（書記）はこの組織が将来の「機関誌」の発行を予定した準備段階のものであると位置づけている。

「Ⅰ．現在では機関誌の発行は時期をえてない，ただ社会的な諸問題に関する学問的な論文を発行しながらそれに向けての土壌を準備することだけが可能である，というあなたのお考えに我々は完全に賛同します。

Ⅱ．我々は自分達の企てによって一つの綱領の下へのロシアの青年達の統合をある程度まで促進するであろうと考えております，またその場合にのみ在外の機関誌は自己の使命を遂行するであろうというあなたの意見に同意します。

Ⅲ．ピョートル・ラヴローヴィチ，あなたに我々の企画の指導者になっていただき，翻訳のための論文を教示したり，また翻訳論文の評価，我々に自分の労作を出版するよう推薦してくる著者達のオリジナルな論稿の評価の面で我々を助けていただきたいと，お願い申し上げる次第です。

Ⅳ．また同時に，我々の企画の事業面の仕事，すなわち入金額報告，及び最適な運用その他に関する報告の業務をもあなたに担当していただきたく，お願いいたします。

Ⅴ．その上，ロシア国外，国内のロシア人青年達に向けての呼びかけをしていただき我々の事業を支援していただきたいと，あなたに願いすることを我々は決めました。当

の機関誌の問題につきましては，将来においてのみ解決可能なことと我々は考え，この事業でのあなたの御教示を完全な信頼をもって考慮に入れる所存です。

文献フォンド形成のための組織のチューリヒフラクションを代表して，

書記：M. フィリッペオ

チューリヒ，1887年10月24日

御返事は次の住所にお願いします。

Zürich. Nelkenstrasse N22/1 Oberstrasse. M. Philippeo」[9]

この手紙と規約で明らかなように，ラヴローフが出版の許可の権限をもち，組織の長としてあらかじめ出版物を「校閲」する権限を有する。この点が「社会主義文献フォンド」の最大の問題となるであろう。

3. 組織の分裂の危機

社会主義文献フォンドの組織はチューリヒだけでなく，他のロシア人留学生が集まる都市（ベルンなど）にも拡大していく。しかしラヴローフの校閲問題をめぐってベルンの方では最初から「人民の意志」派と「労働解放」団派が分裂した。Φ. デンボ（女性）はベルンからラヴローフに次のように報告している。

「1月末にチューリヒの同志達がかの地で形成された文献フォンドに加わるようにと私達に提案してきました。自分の規約を送りつけて，その中で，フォンドの資金で出版される著作は全てあなたの校閲を受ける，とありました。

その時すぐに総会がもたれ，フォンドの形成に関する問題が討議されました。この会議で『労働解放』団が自分の著作を校閲のために送るべきだということに，解放団支持者達は同意しませんでした。そのため（彼らには他の動機もありましたが），彼らは個別のフォンドを形成して，≪ベルン労働解放団文献フォンド≫という名称を冠しました。公衆の一部はそれに加わりました。他の部分はチューリヒのものと同じ規約で同様のフォンドを創設しました。私達のところの会員月額はチューリヒに比べて少なく，20～25ルーブルです。」[10]

興味深いことは，チューリヒよりもベルンの方で先にラヴローフ校閲問題による分裂が起ったことである。ベルンの事態は直ちにチューリヒに飛び火した。

1888年3月，チホミーロフが転向声明の「序文」を送り出した後，チューリヒの社会主義文献フォンドの本部にも分裂の危機が襲ってきた。原因はベルンと同じ「ラヴローフの校閲」を「労働解放」団が拒否したことであった。事態は次のごとくである。フォンドはプレハーノフに彼のラッサールの冊子を出版する上でラヴローフに送るようにといったところ，フォンドに返ってきた答はこうであった。

「1) 上記の冊子の第二部は現代社会主義文庫の出版でこの文庫の発行物の一つとしてのみ印刷される。

2) その編集者はあなたも御存知のように П. アクセリロードと Г. プレハーノフであり，従って出版される予定の全ての手稿は彼らの校閲を受ける。
3) П. アクセリロードと Г. プレハーノフ以外に，我々のところに他の編集者はおらず，従って，
4) 我々は『ラッサール』の第二部を П. Л. ラヴローフの校閲に送ることはできない。もし П. Л. の校閲に手稿を送ることが出版のための資金供与の必要不可欠な条件であるとあなたがみなすのならば，我々はあなたの側からのいかなる援助もあてにすることはできない，と遺憾ながら告白せざるを得ません。」[11)]

この手紙にはプレハーノフとザスーリチの署名がしてあった。チューリヒのフォンドではこの問題をそれまで深刻に考えてこなかった。「チューリヒの解放団派はこのようなことは何も議論しなかった」という。1888年の3月に至って，プレハーノフの著作のラヴローフによる校閲という現実の事態につきあたることで，フォンドは分裂の危機に直面する。

ラヴローフはこの「労働解放」団の校閲拒否に対して最初譲歩はしようとせず，逆に辞意を表明した。彼が「労働解放」団の出版物の校閲に固執するのは，その中に個人攻撃が含まれていないかとの懸念からである。特にこの時期はチホミーロフの仏語版『La Russie politique et sociale』第二版の「序文」が配られ，転向の意志が表明された時と重なった。これがラヴローフを神経質にさせたと思われる。

「社会主義文献フォンド」の委員会は片やチホミーロフの転向問題，片や「労働解放」団とラヴローフの対立，という難題に苦悩した。後者の問題の方が事態は深刻であった。委員会は連名でラヴローフに校閲を全原稿から原稿の梗概に変え，個人攻撃の有無はラヴローフが決めるのではなく執筆者の属する団体が集団で保証すれば可，ということにして事態を収拾しようとした[12)]。

委員会は3月18日にその案を賛成8，反対1，保留1で一旦は可決したものの，次の会（3月20日）になると反対者が次のような論点を出してきた。

1) そのような〔個人攻撃欠如の集団による〕保証の不十分性
2) そのような解決だと，たとえ科学的社会主義に厳に立脚しているにせよ，ピョートル・ラヴローヴィチの見解と不一致の意見を各派が表明するのを許してしまう。
3) その提案自体がピョートル・ラヴローヴィチに委員会総会からの圧力とうつりうる。
4) 出版の現代性の問題解決のためにタイトルだけで「労働解放」団の著作を判断することの困難性[13)]。

この反対意見は，M. フィリッペオ派から出た。それに対しラヴローフに連名で手紙を書いたグループ，Я. ブリンシュテイン（И. デンボの別名），C. ガネリン（1862～1926），И. ゲリファンド（パルヴス），H. ソロヴェイチク（スレプツォーヴァ），P. ソロヴェイチクの5名は再反論した。

「第一点に関しては，グループ全体の書面での集団的保証はフォンドの手中では重要書類であるが故に十分な保証となりうると我々は思える，その上この問題はただあなた〔ラヴローフ—筆者—〕によって決められることである。第二点はあなたによって声明に盛られた我々のフォンドの基本原則に矛盾する。第三点は，ピョートル・ラヴローヴィチに対してはいうも愚かであろう。第四点は，我々の意見では，「労働解放」団に要求するのはタイトルではなく，推薦著作の詳細な梗概である，ということで退けることができる。」[14]（強調原文）

「社会主義文献フォンド」は苦境に陥った。「労働解放」団をフォンドから削除するとフォンドは一つの派のものとなってしまい，これは基本原則の侵害となり，このことをフォンドはロシア国内に事態の現状に関して報告する義務がある，何となれば最初の声明がすでに配布された後である，ということから「労働解放」団をつなぎとめておく必要があるのだ。結局，ラヴローフに譲歩を依頼するしか道がなくなった。ラヴローフはこの手紙の前に辞意を表明していたが，ブリンシュテインらは「フォンドの不偏不党性は，尊敬するピョートル・ラヴローヴィチ，あなたがその長に立っておられ，困難な時にはあなたに決定権がある，ということと密接に関連しております」といって説得した[15]。この委員会の構成は12名であり，そのことは，この時点（3月23日）でサークル代議員と書記，会計係の12名がフォンドの中心にいたことを意味する。上記の五人の他のメンバーは，他の資料から推測すると，ベーク，シェール，フィリッペオ，Б. レインシュテイン，レインシュテイン＝モギリョーヴァ，などだったと思われる。

ラヴローフはこの委員会決定の提案を受けると，「『労働解放』団の書面の集団的保証だけでは，個人攻撃がないことの十分な保証とみなせない」と返事してきた[16]。フォンドの委員会はますます苦しい立場に追いこまれる。しかし，スレプツォーヴァらの必死の懇願が効を奏したか，ラヴローフは規約に新たな補足を付加して校閲について若干の譲歩をしてきた。

「1. 私が知っている外国の社会主義文献の冊子ないし図書の翻訳の選択，あるいは同様の文献の既出版のロシア語図書の再版の場合には，私はいかなる出版がより有益とみるかを示すだけにする。

2. すでにロシアの社会革命文献で有名となった著者のオリジナルな作品，序文，注，は，私あるいは誰であろうと一切の校閲なしにフォンドが出版できる。ただし，ロシアのいかなる社会革命グループに対する個人攻撃もその文献に存在しない，という著者ないしその友人の保証がある限りにおいて。

3. まだ無名の著者の同じ種類のオリジナルな作品は，私が時間がある限りできるだけ校閲する。

4. 翻訳の正確さと序文や注の内容の特殊性については，私が選んだ出版物で，私が編集する出版物に対してのみ責任を私が負う。」[17]

3月29日にこの譲歩案をラヴローフが出し，「社会主義文献フォンド」の委員会もそれで諒承すれば，この件は解決するかにみえた。少くともプレハーノフの著作をラヴローフが校閲する，という事態をまぬがれたかのようにみえた。しかし，委員会はこのラヴローフ案をめぐって紛糾した。ラヴローフ案の解釈をどのようにしたらいいかということで会議を重ねたものの，結論が中々でないままに4月の末を迎えた。「社会主義文献フォンド」は思いがけない事件で分裂の危機にさらされた。

事態はこれまでのラヴローフ対プレハーノフの対立とは全く無関係の，フォンドへの加入問題から起った。フォンドへの加入は，五名以上をかかえるサークルが代議員を出し，それが秘密投票にかけられて選ばれることになっている。4月の26日に，И. И. ドゥゴフスキイともう一人，計二人が代議員として加入を申し込んだ。ちょうどその時，ラヴローフ提案が審議され，ラヴローフに委員会として再説明を求める手紙を出すかどうかで投票が行われ，賛成7，反対7で意見がまっ二つに分かれていた。二人の加入が提議された時，一人の承認投票では賛成七票，保留七票，もう一人の投票では賛成六票，保留八票という奇妙な結果となった。二日後に再投票ということになった。すると一人には賛成八票，保留五票，反対一票，もう一人には賛成七票，保留六票，反対一票，という又もや不思議な結果となった。反対票一では加入させないわけにはいかない，ということでこの二人は結局，4月29日入会が承認された。

ところが選ばれた二人は直ちにフォンドの総会を開いてくれと要求した。1888年5月3日，24名からなる総会が開かれ，秘密投票における幾人かの代議員の行為の道徳性について審議が行われた。一回目の投票と二回目の投票で態度を変更したものは不道徳とみなす，と決定された[18]。

このような道徳性問題が討議されるようになれば，その組織の分裂は当然である。5月4日，「社会主義文献フォンド」から問題の七名の代議員が独立することとなった。彼らはロシア文庫の読書室に独立の声明文を掲示した。それは次のように書かれていた。

「社会主義文献フォンドの代議員達の半数は，その他の残りの代議員達と共にフォンドの任務を遂行することを不可能と考え，独立の機関として機能していく決意をした。フォンドの資金で図書の出版を行うというフォンドの基本原則と目的は従来通りである。新たにフォンドに加入したものを含めて現在（独立は）10グループを数える。

書記フィリッペオ，会計シェール」[19]

フィリッペオとシェールの派は元々七つのグループを傘下にいれていたが，新規に三つのグループを加入させて計十グループとなったのである。それと対立する派にとってみれば，前回の会議まで（つまり5月3日まで）独立について何も聞かされておらず，寝耳に水の出来事であった。

もう一つの派は，書記 H. スレプツォーヴァ，会計 Я. ブリンシュテイン（＝イサアク・デンボ）の名で声明文を作成し，分裂の経過説明を行ない，分裂によってフォンドの今後の活動に支障がないことを希望し，自分達もラヴローフの基本原則にそって活動すると宣

言した。

「社会主義文献フォンド声明[20]

1888年5月4日チューリヒでフォンドの会議がもたれ，そこでフォンドに送付されてきた添付の抗議文が読み上げられた。この抗議に対して，フォンドは声明を出し，上記の抗議が向けられた当の人々のグループはすでにこの事件の審議のすむ前にフォンドから脱退した，と宣言した。（このグループはロシア読書室に掲げた声明の中で自己の脱退を宣言した。）加入の投票を通った人々は，フォンドの代議員として採択されたものと見なされる。なぜなら，フォンドに残った代議員達は彼らの加入に何ら反対ではなく，また彼らをフォンドの全必要事項に完全に合致している人々とみなしているからだ。フォンドは今のスタッフで，П. Л. ラヴローフによって導入された基礎の上に機能し続ける。

書記　H. スレプツォーヴァ
会計　P. ブリンシュテイン」

ブリンシュテイン派は新しい代議員二名の加入の正当性の確認，ラヴローフの付加した路線継続の確認をして，フィリッペオ派の独立後も同様に活動を続けることを宣言した。ブリンシュテイン派として残ったのは，書記の H. スレプツォーヴァ，代議員の P. ソロヴェイチク，レインシュテイン＝モギリョーヴァ，レインシュテイン，ガネリン，И. ゲリファンド（パルヴス），であった。

フィリッペオ派としては半数の人員を確保しているのだから，「脱退」というよりも別組織として活動することを意味した。彼らも同じ「社会主義文献フォンド」という名称のもとで行動を継続する。ラヴローフは5月9日付の手紙で事情を問いただしたものの，フォンドの方からの通知は一ケ月後の6月8日付の手紙でやっと受けとった。それによると分裂した両派の調整活動はずっと続けられていることが判明した。

1888年の6月8日以前に，フォンドの一方のフィリッペオ派は「≪社会主義文献フォンド≫組織の基本規定」と題する印刷物（石版刷り）を配布した[21]。これはラヴローフの校閲を再確認し，「非党派性」の立場をより明確にし強調したものである。

「≪社会主義文献フォンド≫組織の基本規程[22]

≪社会主義文献フォンド≫のメンバーたりうるのは，下記の≪規程≫の条項を認知し承認するもののみである。

Ⅰ．≪フォンド≫は非党派機関である。この基本規定から以下のことが出てくる。

1）≪フォンド≫の課題は≪全ての派にとって等しく有益な科学的社会主義の性格の著作を出版すること≫である。

2）全ての傾向の社会主義的革命的内容の著作にある意味での有用性を認めながらも，なお≪フォンド≫が出版費用を与えるのはただ≪フォンド≫の課題に応える著作だけである。

Ⅱ．≪フォンド≫の出版活動に対して，その課題実行の正当性に関心をもつ者への保証

として，統制（コントロール）が必要である。

1) 統制機関の任務は，出版の推薦を受けている著作が≪フォンド≫の課題に適っているか否かをその都度調べることである。

2) ≪フォンド≫の出版活動の統制には，当の問題の解決において読者公衆に不偏不党性と非党派性を一般に認められた機関または人物のみがあたることができる。

3) かかる統制機関たりえないのは：

a）≪フォンド≫の代議員――なんとなればそのスタッフあるいはそのメンバーの大多数は私的な場合に党関係者であることがある。

b）出版の推薦をされている著作の執筆者（自分の著作にとって）。

これは次の事情によって当然である。あれこれの執筆者が党派の代表者である時，彼らによって推薦される著作が≪フォンド≫の課題に厳密に合致するという彼らによる書面での保証があったとして，それが他の派からすれば疑問視されることがありうるし，≪フォンド≫はその意見も，非党派の立場から考慮せざるをえないのである。

Ⅲ．現時点ではこの統制機関の役割，つまり≪フォンド≫の出版活動指導の任は，ただП. Л. ラヴローフにのみ委ねられる。彼は不偏不党であり，≪フォンド≫の課題実行の正当性をラヴローフが保証すれば，それはロシアの諸サークルの間のみならず外国でも最も承認されることである。

1) ロシアの同志達への呼びかけのために自分の名前を貸すということで，П. Л. ラヴローフはこの役割を引き受けた。

2) П. Л. ラヴローフからの事前評価がなければいかなる著作も出版されえない。

3) ≪フォンド≫の代議員会は出版の推薦をされている著作の著者に次のことを通知する。П. Л. ラヴローフがこのような評価……〔あと紙が途切れている〕」

この「規定」は5月4日に分裂したフォンドの両派が，分裂後も一つの組織名「社会主義文献フォンド」で活動していこうとして，5月9日以降6月上旬まで数多くの会合を重ねていく間に，フィリッペオ派の方から出されたものである。ラヴローフの校閲の権限をより強化する方向で「規定」を作成している。この意味でフィリッペオ派は「社会主義文献フォンド」のラヴローフ校閲支持派である。

それに対してブリンシュテイン派は，ラヴローフの校閲を弱める方向で「労働解放」団のつなぎとめの努力をする傾向をもった。従って既述のラヴローフの譲歩の四点を校閲緩和の方向で解釈すると同時に，これら四点を「規約」に補足すること，そして校閲には「詳細な梗概」を送ればよいという補注をつけること，を主張した。そしてフィリッペオ派への質問状を，次の問いかけで締めくくっている。

「フォンドに推薦されている図書出版の全てをピョートル・ラヴローヴィチが検定のために校閲するのを，あなた方は必要不可欠と見なされるのか，それとも我々の上述の解釈に同意なさるのか？」[23)]

結局，分裂の原因がラヴローフ校閲の解釈をめぐって生じたことを資料は物語ってい

る。元をたどればプレハーノフの抗議に端を発したものである。しかしながら，この時社会主義文献フォンドが二派に分裂したことを，「人民の意志」派と「労働解放団」派に分裂したと表現するのは正確でない，という。スレプツォーヴァによれば，ブリンシテイン派にも解放団派が二グループ残り，フィリッペオ派にもシェールやベックなどの「人民の意志」派と称されるものが加わった。

「フォンドが解放団派と人民の意志派の二派に分裂したという噂は嘘です。我々のフォンドに残ったものには，あなたも御存知の人民の意志派サークル会員と二グループだけの解放団派が入っております。分離した側には今までかつて自ら革命家と称したことのない人々がいて，ただシェールだけが人民の意志主義者とみなされています。あちらにはまだベックという革命家がもう一人おりますが，手紙の最初に申し上げたように，彼はロシア国内では決してそのような革命家ではありませんでした。」[24]

分裂したもう一つの派，M. フィリッペオ（書記）とシェール（会計係）がひきいる派もまたラヴローフとの連絡をとり続けようとした。おそらく1888年の秋に出したと思われる手紙で M. フィリッペオは次のように書いている。

「社会主義文献フォンドの事業の討議のために夏休み期間の後で会合をもった結果，我々≪フォンド≫の代表者達は，我々があなたに今送付するような形で規約の基本条項を編纂する必要性があるとの結論に達しましたので，ピョートル・ラヴローヴィチ，どうかこの際従来どおり我々のたてた目的達成のために我々を御支援くださいますようお願い申しあげます。

≪フォンド≫委員会を代表して
書記　M. フィリッペオ

P. S. これにフォンドの会計報告と現金百五十フランを同封します。フォンドの委員会は現在11グループ代表者を数えます。　M. Φ.」[25]

そして同封の会計報告は次のようになっている。

≪社会主義文献フォンド≫会計報告

4月	42フラン	70	サンチーム
5月	31 〃	—	〃
6月	33 〃	40	〃
7月	26 〃	—	〃
計	133フラン	10	サンチーム
Xより	8 〃	—	〃
ロシアより	75 〃	—	〃
計	216フラン	10	サンチーム

舞踏会より現在43フラン50サンチーム取得
計　　259フラン60サンチーム

あなたに当面150フラン送金します。
残金は近いうちに12月分の入金と一緒にして送ります。

会計係　シェール[26)]

フィリッペオ，シェール派がこの後ラヴローフとどのような関係となったか，筆者には定かではない。

なお，分裂したもう一方の派からも送金は続けられている。1888年8月ごろの手紙でスレプツォーヴァは，「我々の側のフォンドによって集められた169フランかそれを少し上まわるお金をあなたはもう受けとられましたか？」[27)]とラヴローフ宛に書いている。資金的にはラヴローフの手中で社会主義文献フォンドは「統一」されていたことになる。

4.　ラヴローフと「社会主義文献フォンド」の対立

ラヴローフにはチューリヒの「社会主義文献フォンド」の分裂状況がはっきりとつかめなかった。何派と何派が分裂対立し，何派と何派が合同しているのか。フィリッペオとシェールの方はラヴローフの権限強化を主張するけれども，革命陣営にとって無名の青年達が主となっている。「人民の意志」派の最も勢力的な活動家ブリンシュテイン（デンボ）は「労働解放」団のつなぎとめにやっきになっている[28)]。1888年の5～6月の分裂は二人の代議員の加入問題が表向きの原因であるが，根はラヴローフの「校閲」問題にある。

事態は7月に入ってさらに複雑化した。もしかしたら，より単純化したといってもよい。ブリンシュテイン派がさらに再分裂したのである。今度は，「人民の意志」派と「労働解放」団派社会民主主義者との分裂であった。ブリンシュテイン派から，社会民主主義者のソロヴェイチクとスレプツォーヴァ夫妻及びガネリンらが訣別した。後者はモルネーで会議をもち「社会民主主義者同盟」結成に動き出した[29)]。スレプツォーヴァはそれでもまだ「労働解放」団派と「人民の意志」派の結合の夢をすてきれずに，ラヴローフとの接触を続けていた。しかし，彼女の行動はラヴローフを怒らせる方向で，「労働解放」団への出版援助に固執するものであった。

1888年8月9日付の手紙でスレプツォーヴァはラヴローフにとって寝耳に水のような依頼をしてくる。「労働解放」団の側へのフォンドの支出をプレハーノフの『ラッサール』からザスーリチの『インタナショナル』に代えたい，と彼女は書いてきた。これはプレハーノフの差し金であった[30)]。ラヴローフの校閲をザスーリチは受ける用意がある，とのことで，スレプツォーヴァは早々と原稿の活字化された見本まで送り届けてきた。ザスーリチの著作は『社会民主主義』誌第1冊（1888年）に「国際労働者協会史概要」と題して第三章まで発表されていた。ただ出版費の不足のためにごくわずかの部分しか発表できなかったという。それで残りの部分を「社会主義文献フォンド」の費用で出版しよう，とスレプツォーヴァは提案してきたのである。

「それは八つ折版紙で8枚の大きさで，2枚はもう活字化され，あと残りの6枚が資金不足なのです。ヴェーラ・イヴァーノヴナはあなたの校閲用にそれを喜んで送るとすぐに同意してくれました。」[31)]

ザスーリチの「インタナショナル」に関する冊子を「社会主義文献フォンド」の費用で出版することは，フォンドの「労働解放」団派の存在理由を問うものであった。プレハーノフの冊子『ラッサール』は彼自身がラヴローフの校閲を拒否したため，フォンドの規約に合致せず，出版が困難となった。しかし，ザスーリチがもし自分の冊子をラヴローフの校閲に委ね，出版の運びにいたったとするならば，フォンドの「労働解放」団派は「人民の意志」派と訣別してもフォンドに依然としてとどまっている意味がある。

「こう確信すればこそ彼ら（社会民主主義者達）は今までフォンドに残って，この機関と並んで別組織を作らないでいるのです。」[32)]

フォンドはすでにラヴローフの序文を付したマルクス著『ヘーゲル法哲学批判・序説』と H. C. ルサーノフ訳のカウツキイ著『カール・マルクス経済学説解説』，と「人民の意志」系の出版物を援助したのだから，今後は「労働解放」団に資金を出すべし，とスレプツォーヴァはラヴローフに手紙を書いた。彼女の言葉の調子は極めて強い，ぶっきらぼうな感じを与える。

「フォンドは二つの派（фракция）のために形成されたのですから，他方の派も自己の出版物への資金供与を受ける権利があります。これらの両派のうち一つの派の出版物ばかり印刷するというのではなくて。私は『ブリューメルの18日』がフォンドからやはり資金を受けることをちっとも疑っていません。しかし順番がちがいます。フォンドに参加している一つの派が自分の出版物の資金を受けとったのですから，他の派もその権利があります。」[33)]

スレプツォーヴァとの文通はここで途切れている。ラヴローフの「社会主義文献フォンド」に対する不信の念はますます強くなる。彼はスレプツォーヴァのみならずブリンシュテインをも「偽善者」とみなすようになった。

ラヴローフはチホミーロフの転向冊子『私は何故革命家たることをやめたか』に対する反論として『Л. А. チホミーロフの冊子に関するロシア国内の同志への手紙』（1888年8月10日付）を書いた。この時，「社会主義文献フォンド」のブリンシュテイン＝デンボ派はラヴローフにこの手紙の出版費用の拠出を申し出た。しかし，ラヴローフは H. H. スレプツォーヴァとザスーリチの著作出版問題でトラブルを起している時であったので，ブリンシュテインの態度を怪訝に思った。ラヴローフは H. H. スレプツォーヴァがブリンシュテインと袂を分かち完全にプレハノーフ側に移ったことを知らされた。彼は次のような手紙を受けとる。

「チューリヒの事情に関して理解の齟齬があったようです。あなたは，私の理解するかぎり，チホミーロフへの手紙の出版資金をあなたに申し出ておきながら，一方でザスーリチの出版資金拠出をあなたに求めるということを，言行不一致だと見なされております。事態はこういうことです。ブリンシュテインのグループは全く自主的に自分のふところからこの資金提供を申し出たのであり，H. H.〔スレプツォーヴァ〕はフォンドの資金から拠出をしようとしたのです。H. H. はすでに完全に人民の意志派と一切の関係を絶っており，みずから社会民主主義者と名のっています。つまり彼女はブリンシュテイン派とは何の共通点ももっていません。私はプレハーノフの人民の意志派への回答の手紙を送ってもらう約束です。その手紙は，プレハーノフの追随者達によってもくろまれたいざこざに結着をつけるためにあなたと個人的交渉をしたいという彼女の願いに関して，プレハーノフが書いたのです。青年達の話から判断すると，彼らは決して言行不一致の偽善をしているのではなく，衷心より，激した社会民主主義者と人民の意志主義者達を和解させたいと思っています。」[34)]

ラヴローフの不信の念はつのるばかりであった。特に，この時期（8月）はまたもやチホミーロフの冊子『私は何故革命家たることをやめたか』が出た時と重なった。「社会主義文献フォンド」の危機は，最初の3月にはチホミーロフの「序文」と，8月は転向冊子と，皮肉な運命で結ばれていた。「社会主義文献フォンド」はこれ以降も存在していく。問題となったザスーリチの『国際労働者協会史概説』は，「ロシア社会民主主義者同盟(Русский социаль-демократический союз)」の出版物として1889年に世に出る。そして「社会主義文献フォンド」はこれに214フランを出版費として援助した[35)]。また，ラヴローフ訳のマルクス著『ブリューメルの18日』にもフォンドは出版の援助をしようとしている。しかし何故，「社会主義文献フォンド」は分裂しながらも存続していくのであろうか？

この疑問に対する回答は，これらの史料の発掘をまたなければ正確なことはいえないけれども，既刊資料の中ではアクセクロードのラヴローフあて手紙（1888年8月16日付）が参考になる。

「社会民主主義への偏見で育てられた青年達の代表者は手紙の中で，共通の敵に対する共同の闘いのために文筆家の革命勢力の合同を我々に頼んでいます。この青年達に一切の闘争から身を引くように呼びかけるチホミーロフの冊子が出たことは，人民の意志主義者のサークルのこの手紙で語られている『合意』の必要性を示す赤裸々な例でありましょう。」[36)]

人民の意志派からの手紙は7月10日付であったが，アクセリロードは8月15日に受け取った。何故遅れたか定かではないが，その遅れによりチホミーロフの転向冊子と時期的に重なることとなった。

社会主義文献フォンドは1888年7月に「人民の意志」派と「労働解放」団派に内部分裂したのであるが，「労働解放」団自体は，アクセリロードによると，この分裂を食いとめ

フォンド内に残るよう自派の青年達を説得したという。

「我々が自分の側から統一のためになしえた唯一のことは，フォンドの社会民主主義分子が独立の≪社会民主主義フォンド≫を分離するのを押しとどめたことです。彼らは1ケ月半か2ケ月前にこの分離をとてもしたがっていたのですが。」[37]

フォンドは諸派に分裂したもののかろうじて崩壊を回避した。基金は分割されなかった。「社会民主主義フォンド」の形成にはまだ至らなかったのである。チホミーロフ問題が8月に頂点に達したとき，アクセリロードは「社会主義文献フォンド」の動揺を口実に，ラヴローフに共同行動を呼びかけた。ラヴローフはその呼びかけを退けてしまった。

「社会主義文献フォンド」はどのような意義をもっていたか？　ただ単に「社会主義文献」の出版と配布にとどまるのではなく，それは社会主義者全ての結合の試みとして期待されていた。ベルン支部からの手紙によると次のように書かれている。

「私達はフォンドを，国外ばかりでなくロシア国内の全てのロシア人社会主義者の共通の統一事業として見ております。なぜなら，将来私達が堅固な基盤の上にフォンドをすえることができたならば，社会主義者達はフォンドに参加するであろうと私達は確信するからです。」[38]

このような期待と確信をもって亡命者や留学生達の各地のサークルが「社会主義文献フォンド」に代表を送って参加したのである。しかし，これまで紹介したように，「社会主義文献フォンド」は外国在住の古参の思想的指導者達，ラヴローフ，プレハーノフの大きな影響をこうむらざるをえなかった。実践活動家青年達は，権威あるイデオローグ達と無関係に活動を自分達だけで継続することはできなかった。プレハーノフとラヴローフだけではない。「社会主義文献フォンド」の成立時から分裂の全期間にわたって，チホミーロフの転向[39]が陰をおとしていた。

II.　チホミーロフの転向と「社会主義文献フォンド」

1887年の夏，「社会主義文献フォンド」の準備段階で，「人民の意志主義者サークル」はチホミーロフに協力を要請した。しかし彼は断わりの回答をよこした。

「あなた達が有益だと考える事をなさるのは素晴らしいことです。まさにこの出版は事実有益であります。しかし，これは私が献身したいような事業ではないし，自分のすべきことと私がみなす事業でもありません。告白しますと，私がより深く考え観察し勉強すればするほど，最後にはあらゆる革命派〔フラクション——筆者——〕の外に自分がいるように私には思えてくるのです。とくに理論上の世界観の意味で。」[40]

チホミーロフは1887年の11月15日に“La Russie politique et sociale”の第二版「序文」をサヴィンの印刷所に入れた。この転向声明の4日前，11月11日にスレプツォーヴァがラヴローフの紹介状をもって彼を訪問する[41]。しかし，彼女に向かって上記の手紙以上のことはいえなかったであろう。1888年2月29日に彼は「序文」の抜き刷りを受けとり，直ちにかつての革命の同志達に発送した。「序文」で彼は帝政ロシアの開明官僚の功績を強調し，それを自己の理想とした。

「皇帝ニコライⅠ世の御世に政府は国有地農民の改編に着手した。自分の思想の執行者として皇帝は非常に秀れた人選をし，キセリェーフ伯爵というロシアがかつて生んだ中でも最も偉大な国家的人物の一人を選んだ。」[42]

キセリェーフのような有能官僚こそ，転向の希望の灯であった。さらに「専制」の果たした功績について彼は次のように評価する。

「……≪絶対主義の下でどんな文化活動がありえよう！≫と叫ぶほど自国の歴史を忘却した行為はあるまい。ピョートルははたしてツァーリではなかったか？　全世界史の中でこれ以上に広範で急速な文化活動の時代があっただろうか？」[43]

彼はさらにエカテリーナⅡ世，ニコライⅠ世，アレクサンドルⅡ世の進歩的役割を高く評価し，帝政自体が進歩の要因となる，と結論した。さらに，その例証として帝政治下でのロシア文学の輝かしい発展をあげる。

「……キセリェーフやミリューチンに限らず，ロシアの発展を促した全ての人々をもち出して〔帝政批判者を〕批判することができる。プーシキン，ゴーゴリ，トルストイは専制君主国家と文学の偉大なる進歩とが共存できることの証しではなかろうか？」[44]

そのように歴史における帝政の役割と官僚の役割を高く評価して，彼は革命党のテロリズムの闘争を無益なものとみなす。革命諸派の側からはこの「序文」での転向声明に対する抗議が起きてくる。

かつての同志達，M. H. オシャーニナ，H. C. ルサーノフ達は，『革命かそれとも進化か』という冊子を発表した。さらに青年急進派からは「人民の意志グループ」の署名で『ある序文について』という冊子が出た。プレハーノフは「不可避の転換」と題して論文を『社会民主主義者』論集に発表した。

「社会主義文献フォンド」はチホミーロフ問題の特別の「委員会」をつくった。しかし自分達は古参の革命家達の発言を期待する，という静観の態度をとった。彼らは次のようにラヴローフに書いている。

「チホミーロフに対して我々は今のところ何も書かないので，あなたと他の革命勢力の

代表者達がまず一言いって下さるようお願いします。彼が懐疑の気持のあまり直ちに否定的な態度をとることのないように。我々はあなたの助言どおりに行動します，もし必要とあらば彼に公式の請願状を送ります。ただ，まだあなたがこの事態にどう対応されるか，という重要な事を知らないうちは，この一切について語るのはまだ時期尚早です。起りうるすべての不都合〔二語未解読〕はこのためにあえて臨時に設置された委員会によって除去されることでしょう。プレハーノフとアクセリロードとその仲間は同情的な態度をとるようです。だからあなたに最初で最後のきっぱりした言葉と助言を頂きたく存じます。どうか拒絶しないで下さい。」[45]

この手紙はプレハーノフがラヴローフの校閲拒否をうち出し，フォンドが会議を重ねていた1888年3月下旬のものである。フォンドの代議員の中には Г. ベークのようにチホミーロフ殺害を企てていた者もいた[46]。

「人民の意志」党のかつての同志達，オシャーニナやルサーノフは，党の政権奪取により国家の経済構造を政治の力で改造する，という方針のために，キセリェーフの改革の功績自体を批判することは困難であった。相違は，政権奪取した革命家が改革を行うか，それともツァーリの開明官僚が行うか，にあった。しかし，自分自身がツァーリ政府の軍学校の教官としてツァーリの官吏だったラヴローフは，チホミーロフの帝政護持・開明官僚評価に対し厳しい反論を展開した。この反論は『私は何故革命家たることをやめたか？』への反論である。

「我国のインテリゲンツィアはピョートルⅠ世の御世及びエカテリーナⅡ世の治世の初期にはこぞって専制の支持者であった。<……>それから後に反体制へと転じていき，ついには少数者による革命の問題を提起したのである。」[47]

ラヴローフによれば，十八世紀の絶対王政（帝政を彼はこう表現する）はロシアでは進歩的役割を果していた。しかし，フランス大革命以後，この絶対王政は反動に転じたと見る。専制をあくまで守ろうとする君主達は全てが反動となった。

「自ら『幸福な例外』と称したリベラル皇帝アレクサンドルⅠ世も統治の末期にはアラクチェエフの道具と化したのである。」[48]

ラヴローフはこのようにして，いかにリベラルな皇帝でも専制の必然的性格により十九世紀には反動にならざるをえない，これが歴史の必然の発展法則である，とのべた。そして彼は専制治下の文学の発展という現象について次のように説明する。

「ニコライ帝の御世にロシア社会が今にいたるも糧とする全ての社会思想が発達したという時，彼は正当である。しかし，これらの思想がいったいどのようなものであったのか？　反専制，反農奴制，反官僚制，反警察機構，社会的惰眠状態への反対，という思

想であった。つまり，Л. А. チホミーロフ氏が，政府から教養層の力を登用する可能性を奪うという理由で，今日の成熟した十九世紀の時代としては拒絶すべしと勧められている当の思想である。ここにまた相互に準備しあう諸段階の宿命的交代がある。ロシアの進化論者が見ようと望まない進化の宿命的プロセスがある。歴史全体が示していることは，『生きた力』が存在する所では，病的な保守主義は至る所に反体制分子の不可避的な成長を呼び起すということである。そしてこの『生きた力』が状況に応じてどのように改革をかちとり，あるいはまた，革命の手段に訴えざるをえなくなるか，歴史全体が示してくれるのである。」[49]

このようにラヴローフの反論は，反動的な専制政府自体が自身の内に反政府的思想を生み，それが変革につながる，というものである。帝政の内部の肯定的な開明官僚が進歩を生む，とするチホミーロフの思想とは真向から対立する論理であった。

一方，プレハーノフからの批判は，ノヴィコーフ，ラヂーシチエフからドストエフスキイまでの文学者達の悲惨な運命をみるとき，「我国の文学は専制に『抗して（ヴォプレキー）』」発展したのであり，専制の「おかげで（ブラゴダリャー）」ではない，というものである[50]。そしてキセリェーフの功績について，「現実にはキセリェーフ改革は，インカ国家の経済的諸制度の矛盾だらけのくすんだコピーを十九世紀ロシアに移植するという，失敗した試みにすぎない」[51] とみて，ほとんど分析を加えていない。

チホミーロフの転向はそれまで単なる否定の対象として看過されてきた帝政の役割，官僚の役割，等の問題を革命陣営につきつけた。「労働解放」団はこの転向の影響をくいとめようと努力した。「社会主義文献フォンド」との関係にその努力があらわれていた。

社会主義文献フォンドに対していかに不満があろうとも，「労働解放」団はそれと訣別することはできなかった。理由は，青年達の革命運動への関心をせめてこのような組織の形でもつなぎとめておく必要性を痛感していたからである。プレハーノフ達は国内の青年の気運として，革命への関心よりも帝政護持的気分が広がり始めたことを伝えている。

「ロシアの若者の一部は，チホミーロフ氏の経済的見解を支持しつつ，帝政社会主義，あるいは，キセリェーフ的社会主義に熱中し始めている。」[52]

アクセリロードもチホミーロフの転向は，「王党派ナロードニキ」の勢力の増大を意味するとして警告を発する。つまり，ナロードニキの農民社会主義を帝政によって実現しようという思想の流布にこの転向が油を注いでいる，という。

「以前のナロードニキ的諸理想，それから論理的に自己の見地から自分の新しい実践的見解を発展させることで，彼はロシア国内の農民民主主義者グループ全体の体現者である。思い出してください。B. B.（ヴォロンツォーフ），プルガーヴィン，ズラトヴラーツキイ，ユジャコーフ(Sic!)は多くの点でチホミーロフに共感するにちがいありません。プレハーノフは二年ほど前にもう，ナロードニキ文学者の間をうろついていた一人の青

年の口から，王党派ナロードニキの見解を聞くはめになったことがあるのです。」[53]

アクセリロードは青年達がチホミーロフの影響で王党派に傾くことに対して，さらにまた単なるリベラルに加わっていくことに対して危機感を抱き，ラヴローフに手をさしのべて「社会主義」の下に共同行動をしようと提案した。ただこの呼びかけは，ラヴローフに「現代社会主義文庫」（「労働解放」団の出版組織）に加入せよ，というものであったためラヴローフにはとうてい受けいれ難かった。

結　　語

「社会主義文献フォンド」の分裂は，「労働解放」団とラヴローフとの間の対立がきっかけとなって引き起されたものであるが，時期的にはその上にチホミーロフ転向問題がぴったりと重なっている。これは，思想家達の影響力の強さを物語っている。留学生と若き亡命者達の青年活動家達は，思想家達の対立の渦の中で分裂していった。非合法活動という制約条件の中ではどうしても運動を保証してくれる権威ある思想又は思想家が必要である。「社会主義文献フォンド」がラヴローフの権威を必要不可欠のものとしたのもやむをえないことであった[54]。しかし，そのこと自体が分裂の原因となったのである。きわめて皮肉な事態である。

「社会主義文献フォンド」は「社会主義」を共通の旗として革命諸派を大同団結させようとした。その意味で当時としては運動の大勢から外れていたといえる。なぜなら，例えばクリャプコ＝コレツキイのように，当面の「立憲」という自由主義的課題の下に，リベラルと革命家社会主義者を含む連合戦線を築こう，というのが当時の大勢であったからである。ドラゴマーノフ，デバゴーリイ＝モクリエーヴィチ，そしてブールツェフ，さらにステプニャーク＝クラフチンスキイらは，まさにこの直後からリベラルとの共闘をめざして「立憲主義」を前面に掲げていく。九十年代にはプレハーノフもこの方向に加わっていく。

「社会主義文献フォンド」のメンバーは分裂後，さらに活動を続け『社会主義者』誌を1889年に発行する。これについては稿をあらためて別の機会に紹介したい。『社会主義者』誌はプレハーノフ，アクセリロードの他に，ラヴローフまで加わっている。これは，テロリズムを容認する以外には，全く「労働解放」団の主張と同じである。「社会主義文献フォンド」の「人民の意志」派は，社会民主主義の方向に限りなく接近しながらも，テロリズムだけは放棄できなかった。組織の中心的活動家ブリンシュテイン＝デンボは，アレクサンドルⅢ世暗殺用に製造した爆弾の実験中に死亡した[55]。1889年3月6日のことである。

人脈と思想的類似性から判断すると，アレクサンドル・ウリヤーノフの「人民の意志党テロフラクション」からの亡命者が「社会主義文献フォンド」の中心組織者（デンボ）となり，そこから『社会主義者』誌発行グループが出てくる[56]。この一連の組織は社会民主主義的テロリストという共通性がある。

本稿で紹介した「社会主義文献フォンド」はまだ未知の部分が沢山あり，アルヒーフ資料の検討・解読も十分ではない。筆者は主としてラヴローフ文書の中の史料に依拠したので，当然ながらラヴローフ宛という制約で手紙や文書が書かれている，という条件を考慮しなければならない。多くの新事実を提供しえたとは思うが，その新事実への意味づけは必ずしも十分ではない。その意味で本稿は「社会主義文献フォンド」の紹介の一つの試みにすぎない。

— 注 —

1) Norman M. Naimark, *Terrorist and Social Democrats: The Russian Revolutionary Movement under Alexander III*, Harvard Univ. Press, 1983, p. 3.

2) 今日まで「社会主義文献フォンド」に関する詳しい研究はない。筆者が参照できた文献の中ではГ. С. ジュイコフの紹介が最も詳細である。см. Г. С. Жуйков, *Группа ≪Освобождение Труда≫*, М., 1962, с. 101–102. 警察資料に依拠したジュイコフの紹介によると次のようにその参加者を描いている。「『社会主義文献フォンド』のメンバーのうち警察が『労働解放』団支持派としたのは，Д. マトヴェーエフ，О. ゴヴォルーヒン，М. ギンズブルグ，Г. グコフスキイ，М. マチアス，Н. スレプツォーヴァ，Р. ソロヴェイチク，П. インファンチエフである。『青年人民の意志主義者』デンボ，グナトフスキイ，その他多くが『労働解放』団の活動に共感をもっていた。デンボは例えば『労働解放』団の出版物の注文取りの仕事もしていた。」（同，с. 101）

フォンドの崩壊後，「在外ロシア人社会民主主義者同盟」が形成されたとして彼は次のように紹介する。

「『社会主義文献フォンド』分裂の後，社会民主主義者を単一の同盟に統一する問題が革命諸サークルで活発に討議された。『在外ロシア人社会民主主義者同盟』創立のアイデアは，諸文書から明らかなように，1887年ソロヴェイチクによって推し出された。П. Б. アクセリロードはこのアイデアを支持するようプレハーノフに頼んだ。その動機は，『彼ら（『労働解放』団シンパ—Г. Ж.）は，革命の学校を出ていない人々であるから，正式に団に加入させるよりも，これらの勢力を今はその方法で利用する方が我々に好都合である』，という。

『同盟』創立の話し合いは冬に行われ，1888年夏の初めのモルネー会議で終った。会議の作業の進行過程で，将来の『同盟』の課題に関する問題で重要な意見対立が起った。ソロヴェイチク，スレプツォーヴァ，クリチェフスキイは，『労働解放』団の出版物に対するコントロールをし，それらの性格を変更する権利を，組織されつつある『同盟』に与えるよう要求した。」……（同 с. 102）

本稿では残念ながらジュイコフの記述を裏づけるような資料は使えなかった。ラヴローフ側のアルヒーフを筆者が用いたせいもあるが，「社会主義文献フォンド」の形成と分裂のプロセスにおいて，筆者はかなり異った記述をせざるをえない。ジュイコフの利用したアルヒーフを見ていないので，現在の段階では筆者の仕事も何らかの事実の一面的な紹介として受けとって欲しい。

なおいくつかの従来の資料では，この組織の中心人物として，И. デンボ，Н. スレプツォーヴァ，А. Д. グナトフスキイ，О. М. ゴヴォルーヒン，Н. А. ルデーヴィチ等があげられている。В. И. Невский, *От "Земли и Воли" к группе "Освобождение Труда"*, М., 1930, с. 243; *Из Архива П. Б. Аксельрода*, Берлин, 1924, с. 35; *Лавров—Годы эмиграции*:

Архивные материалы в двух томах, Ред. Борис Сапир, Дордрехт, 1974, т. II, с. 71.

しかしながら，これらの中心的な構成メンバーの記述については再検討が必要である。

3) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову*, б. д. б. м. ЦГАОР, Ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 35-42 об.

4) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 16 июля* 〔*1887 г.*〕, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 7.

5) П. Л. Лавров, "Предисловие [к Работе Маркса ≪К критике гегелевской Философии права Введение≫]", *Философия и социология. Избранные пропзведения в двух томах*. т. 2. М., 1965, с. 583.

6) Там же, с. 606-607.

ポーランドの秀れた研究者ヴァリツキは，この翻訳者をレーニンの兄アレクサンドル・ウリヤーノフとみなし，「この翻訳は，ラヴローフの興味ある序文を付してスイスで出版された」というが，この立場はロシア人研究者ポレヴォイと共通する。ヴァリツキ著，日南田静真他訳，『ロシア資本主義論争』，ミネルヴァ書房，1975年，210頁。

Ю. З. Полевой, *Зарождение марксизма в России: 1883-1894 гг.*, М., 1959. с. 315.

もう一つの説は И. クニージニク＝ヴェートロフのもので，訳者を Б. И. レインシュテインとする。

см. П. Л. Лавров, *Философия и Социология*, т. 2. М., 1965, с. 683-684.

Н. Н. スレプツォーヴァの手紙によるとこれは集団で訳したように伝えている。前掲 *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 16 июля 1887 г. ... л.* 7.

なお，クニージニク＝ヴェートロフの Б. И. レインシュテインは「社会主義文献フォンド」の代議員である。

なお拙稿，「アレクサンドル・ウリヤーノフと『人民の意志』党テロフラクション」『埼玉大学紀要（外国語学文学篇）』第11巻，1977年，143頁で筆者はヴァリツキ説に疑問を呈した。

7) クリャプコ＝コレツキイが当面の「立憲」という目的のもとに革命諸派を団結させようとした時，ラヴローフはもともと一貫してリベラルとの共闘を拒否する姿勢であったし，チホミーロフは自分の新たな「帝政護持」の思想のために，話し合いは物わかれに終った。プレハーノフはこの提案に対してドラゴマーノフのような自由主義者とは連帯せずとの立場をとった。プレハーノフの二段階発展論からすれば「立憲」の闘争をリベラルと組んでも不自然ではない。事実，1891年の飢饉の時にはそのような方針をとった。しかし，1888年の時点では彼はリベラルには無条件で同調することはないという立場をとった。労働者に対する組織・宣伝活動こそがロシアの市民革命の基礎である，と彼は主張した。プレハーノフによれば，独・仏の歴史をみれば「市民革命」で直接闘ったのは，「教養層」や「ブルジョワジー」ではなくて，労働者階級である。つまり「市民革命」は労働者の参加なくして実現されえないという。

「実際，想像してみようではないか。ペテルブルグの『オープシェストヴォ』（教養層）が革命的精神に鼓吹されてバリケードを築いている。ところが労働者階級の方はこの運動の脇で知らん顔をしている。『オープシェストヴォ』の代表者達を縛って留置場にぶちこんでおくには一握りの警察，一握りの自警団で十分である。ここから必然的に次の結論がでてくる。憲法を獲得するためには我々は，絶対主義に対する闘いに労働者階級を引きこみ，自由な政治機構への共感を彼らの中に呼び起す必要がある。我々に他の道はないしありえない。」（強調原文）〔*Социаль-Демократ.* кн. 1, 1888, с. 8〕

プレハーノフは，リベラルが労働者の役割を無視していると批判する。労働者参加が不可欠の

条件ならば，「市民革命」はすなわち「労働者の革命」である。

プレハーノフの論理に従うと，これから「市民革命」を迎える国々は，「労働者」の利益に沿った「市民革命」を目標とせざるを得ない。ここに，後進国の革命が市民革命にとどまらないで「社会主義」的色彩をもつ革命に突き進む大きな理由の一つがある。不自由なる専制からの解放と経済面での資本家による搾取からの解放が同時に進行することとなる。プレハーノフは専制打倒のあと「資本主義の成熟」の時期を予定した二段階革命論を基本的には主張したけれども，彼の論理，つまり「市民革命」を労働者が担うという論理からは，直接的な移行の立場も出てくる。

8) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 8 июня 1888 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 28об.-31. Устав "Социалистического Литературного Фонда".
9) *Письмо М. Филиппео к П. Л. Лаврову, Цюрих, 24 октября 1887 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 452, лл. 1-1об.
10) *Письмо Ф. И. Дембо к П. Л. Лаврову, 20 мая 1888 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 152, лл. 2об.-6.
11) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову* [*23-27 марта 1888 г.*], ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 18-18об.
12) *Письмо от имени группы "Социалистического Литературного Фонда" к П. Л. Лаврову, Цюрих, 23 марта* [*1888 г.*], *Подписи: Я. Бринштейн, С. Ганелин, И. Гельфанд, Н. Соловейчик = Слепцова, Р. Соловейчик*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 532, л. 2.
13) Там же, л. 2об.
14) Там же, лл. 2об.-3.
15) Там же, л. 4.
16) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, Цюрих, 27 марта 1888 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 19.
17) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, Цюрих, 8. июня 1888 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л, 31.
18) *Письмо к П. Л. Лаврову, Май 1888 г., Подписи: Н. Слепцова, Я. Бринштейн, Р. Солвейчик, Рейнштейн = Могилева, Рейнштейн, Ганелин, И. Гельфанд*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 22-27об.
19) Там же, л. 25.
20) Там же, лл. 25-26.
21) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 8 июня 1888 г.*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 29об.
22) *Основные положения Организации : "Социалистический Литературный Фонд"*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 452, л. 8. Литограф.
23) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 8 июня 1888 г.*, ... л. 30.
24) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову*, б. д. б. м. ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 40-40об.
25) *Письмо М. Филиппео к П. Л. Лаврову*, б. д. б. м. ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 452, л. 5.
26) *Отчет Кассы "Социалистичского Литературного Фонда"*, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 452, л. 7.

27) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову.* 〔*позднее 15 августа, 1888 г.*〕, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 350, л. 48об.

28) *Переписка Г. В. Плеханова и П. Б. Аксельрода,* M., 1925. c. 44. 1888年6月29日付の手紙でプレハーノフは書いている。「一昨日私はブリンシュテインから手紙を受けとった。その中で彼は私に〔チューリヒでの〕出版フォンドに関して彼の同志と我々との間の合意を結ぶのを援助してくれと懇願している。手紙は私に良い誠実な印象を与えた。」

29) 1888年夏，モルネーで社会民主主義的傾向の青年活動家と「労働解放」団三名とが合同して会議を開いた。青年活動家からは H. Слепцова, Райчин, Хинский, С. М. Ингерман, С. Ганелин, Говорухин, Гуковский, Р. Соловейчик, らが参加し，会議は2～3日続いた。社会民主主義者同盟の綱領と規約，活動方針が討議された。ソロヴェイチクとスレプツォーヴァはこの「同盟」による「労働解放」団のコントロールの必要性を提起した。その根拠は，「労働解放」団があまりに抽象論に傾斜しすぎ，かつその論争姿勢が社会民主主義者の活動の妨げとなっている，というものであった。「労働解放」団はそのような提案を却下した。「労働解放」団は「社会民主主義者同盟」のそのような提案の可能性を懸念して，一定の距離を保つことにした。(см. *Переписка Г. В. Плеханова и П. Б. Аксельрода,* M., 1925, c. 29. 注4)

30) *Пелеписка Г. В. Плханова и П. Б. Аксельрода,* M., 1925, c. 45-46.

31) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 9 Августа. 1888 г.,* ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 10об. プレハーノフは「もし人民の意志主義者達が（ザスーリチの出版に）同意しなければ，私の考えでは，我々の支持者達がフォンドから脱退せねばならなくなるだろう，フォンドを社会民主主義者達とその出版に対しての敵対機関とみなして」と書いた。*Переписка Г. В. Плеханова и П. Б. Аксельрода,* M., 1925, c. 50.

32) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 15 августа 1888 г.,* ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 350, л. 46об.

33) Там же, л. 48. *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову,* 〔*позднее 15 августа 1888 г.*〕

34) *Письмо к П. Лаврову, 25* 〔*августа 1888 г.*〕, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, лл. 3об.-4.

35) В. Засулич, *Очерки истории Международного Общества Рабочих,* ч. 1, Издание Русского социаль-демократического союза, Женева, 1889. 『プレハーノフとアクセリロードの往復書簡』の注解者によると，「チューリヒの者達は В. И. ザスーリチの冊子をあまりに社会民主主義的とみなしてその出版は実現しなかった」(Переписка Г. В. Плеханова ... c. 46) としているが，ザスーリチの冊子には裏表紙にはっきりとフォンドの援助が記されている。

36) *Из архива П. Б. Аксельрода,* Берлин, 1924. c. 34.

37) *Лавров — Годы эмиграции, Архивные материары в двух томах,* Ред. Борис Сапир, том II, Дордрехт, 1974, c. 72.

38) *Письмо Ф. Дембо к П. Л. Лаврову, Берн, 20 мая 1888 г.,* ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 152, л. 3.

39) チホミーロフの転向に関してはアメリカのアボット・グリーソン氏の研究がある。Abbott Gleason, "The Emigration and Apostasy of Lev Tikhomirov," *Slavic Review,* vol. 26, 1967, pp. 414-429.

40) *Письмо Н. Н. Слепцовой к П. Л. Лаврову, 16 июля 1887 г.,* ЦГАОР, ф. 1762, оп.

4, д. 330, лл. 9-9об.

41) *Воспоминания Льва Тихомирова*, М.—Л., 1927, с. 209.

42) Л. А. Тихомиров, *Почему я перестал быть революционером*, М., 1895, с. 11.

43) Там же, с. 64.

44) Там же, с. 66.

45) *Письмо Н. Н.Слепцовой к П. Л. Лаврову*, 〔*23-27 марта 1888 г.*〕, ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 16об.

46) *Воспоминания Льва Тихомирова*, ... с. 225.

47) П. Л. Лавров, *Письмо товарищам в России по поводу брошюры Л. А. Тихомирова*, Женева, 〔1888〕, с. 17.

48) Там же, с. 16.

49) Там же, с. 16-17.

50) Г. В. Плеханов, "Новый защитник самодержавия или горе г. Тихомирова" *Избр. философ. произведения в пяти томах* том 1, М., 1956, с. 398-399.

51) Г. В. Плеханов, "Неизбежный переворот", *Социаль-демократ*, кн. 1, 1888, с. 113. スレプツォーヴァは次のようにこの反響を伝えている。

「私が知っている限り信頼できる情報としては，チューリヒの諸グループの多くは解放団派が署名集めのために出した紙に署名することを拒否しました。何故なら『不可避な転向』という論文は彼らにとってあまりに不快におもえて，この論文から判断すればプレハーノフのチホミーロフあて回答はチホミーロフの懺悔自体よりも悪い，と彼らは公然と言っていました。」
ЦГАОР, ф. 1762, оп. 4, д. 330, л. 5об.

52) Г. В. Плеханов, "Неизбежный переворот," ... с. 117.

53) *Лавров — Годы эмиграции* ... т. II, с. 73.

54) Л. フレイフェリドの回想は，С. М. ギンズブルグがデンボと共に在外の「人民の意志」グループを形成しラヴローフから支持を受けた，と伝えている。

「С. М. ギンズブルグから我々は全てを知った。我々は意図的に П. Л. ラヴローフと結びついた。我々の前に『人民の意志』党再興と対専制闘争の広い展望がひらけた。我々は今や我々の隊列に全ての者を呼び集める道徳的権利を得たのだ。」Л. Фрейфельд "Светлой памяти Софии Михайловны Гинсбург", *Каторга и ссылка*, кн. 12, 1924, с. 263.

ラヴローフから承認される，ということは革命運動の真の担い手であることのお墨付きをもらうに等しかった。フレイフェリドはこのグループは「戦闘団」の中央としてラヴローフを「長(глава)」にいただいていた，と証言する。

「中央戦闘グループは国外でラヴローフを長として存在していた。それに入っていたのは古参の人民の意志主義者で——チェプローフ，カーシンツェフ，ソロフツォーヴァと，『プロレタリアート』団のメンデリソン，デンボ，デムスキイその他であった。」(Там же, с. 263)

デンボらのグループが「中央戦闘グループ」としてラヴローフを長にいただいて存在していた，というのは信頼性があまりないように見える。おそらく「社会主義文献フォンド」組織でラヴローフを「長」としたために，国内の革命活動家達にはデンボらの活動の全てにラヴローフが支援を与えているかのような錯覚が生まれたのであろう。

55) Е. ステパーノフの回想によると，1888年～89年ごろのパリのロシア人留学生達の中には，爆弾作りこそが帰国を前にした革命家の義務であるかのような風潮があったという。

「そのスタッフには古参の人民の意志主義者もいれば社会民主主義者もいた，あるいはかなり

強く社会民主主義に傾斜した人々がともかくいたのであった。しかし我々は，ロシアにおける革命運動の条件ではテロ戦術の適用が不可欠となる，との認識を全員もっていた。それ故に，我々のロシア帰国問題が迫ってくると，当然ながら自分をテロに向けて技術的に準備するという問題がおきてきた。何となれば，外国で準備作業した方がロシア国内でよりはるかに容易で都合がいいことが我々には皆明白であったからである。」 Е. Степанов, "Из заграничных воспоминаний старого народовольца", *Каторга и ссылка*, кн. 24, 1926, с. 123-124. パリでの爆弾の製造仲間として，ステパーノフが挙げているのは，ブールツェフ，ラヴレニウス，カシンツェフ，Б. レインシュテイン，Ю. ラッポポルト，そしてスパイのランデゼン等であった。皆，ほとんどがラヴローフのアパートに出入りしていた。ランデゼンのために結局この爆弾製造組織は全員逮捕され壊滅した。ラッポポルトはロシア国内潜入時に逮捕された。

56) *Социалист*, № 1, 1889, の39頁にデンボ＝ブリンシュテインの追悼記事が掲載された。

A Short History of the "Socialist Literature Fund" (1887-1888)

—— Russian emigre-Revolutionaries between Narodovol'chestvo and Social-Democracy.

Teruhiro SASAKI

This article deals with the short history of the organization of the "Socialist Literature Fund" (1887-1888), which is very little known in our historiography. This work aims to show how this "Fund" was formed and how it was dissolved, as documented in unpublished letters, written by members of the "Fund" to P. L. Lavrov. The Circle of Narodovol'tsy, organized by Brinstein (Isaak Dembo), N. N. Sleptsova and others, dedicated itself to the publication of books and pamphlets on scientific socialism. In the autumn of 1887 Lavrov gave his blessing to the circle and its objectives. The first publication was the well-known "Zur Kritik der Hegel'schen Rechtsphilosophy, von Karl Marx, Einleitung. 1844" in Russian translation. The Circle formally organized the "Socialist Literature Fund" and composed its "Ustav" (Charter) on October 24, 1887.

The Committee of the "Fund" consisted of representatives from various Russian emigre groups. The secretary of the "Fund", M. Philippeo, asked Lavrov to become the head of the "Fund", and he agreed. Lavrov became not merely the advisor but the actual leader of the "Fund" with absolute control over the choice of publications. No books could be published without his "prosmotr" (review).

In 1888 the "Fund" proposed to G. V. Plekhanov that he publish his work on "Lassalle" at the expense of the "Fund". But Plekhanov rejected this proposal, saying that he could not send his work to Lavrov for a "prosmotr". In March the "Fund" asked Lavrov to reconsider his right of "prosmotr". Lavrov agreed, so long as personal attacks were excluded from the publication.

This question arose at the same time as the publication of the "Preface" to "La Russie politique et sociale" by Lev Tikhomirov. Lavrov was somewhat sensitive to personal criticism. At last Lavrov added an amendment to the "Ustav", saying that the works of well-known authors could be published without his review. But Philippeo and some other opposed any weakening in Lavrov's authority, saying that it is an insurance of nonpartisan principle of the "Fund".

On May 3-4, 1888, a meeting was held. The "Fund" split into two factions : one was led by Philippeo and Sherr (and included Bek and others), and the other by Brinstein and Sleptsova (and included R. Soloveitchik, Reinstein-Mogileva, Reinstein, Ganelin, I. Gelifand [Parvus] and others). So the initial division was not between Narodovol'tsy and Social-Democrats, as we see from the membership of the factions. The Brinstein-Sleptsova group was more political than the Philippeo-Sherr group.

Philippeo's faction redrafted "The Basic Statutes of Organisation of the Socialist Literature" and continued to send Lavrov the money they gathered. But the other faction divided in early July of 1888 into two more factions : Narodovol'tsy (led by Brinstein) and Social-Democrats (led by Sleptsova and her husband Soloveitchik).

Why did the "Fund" experience such an ill-fated history ? First, the debate between Lavrov and Plekhanov was so intense that the "Fund" could not accommodate the differences of opinion between the two political thinkers. Secondly, the celebrated conversion of Tikhomirov cast a heavy shadow over the whole enterprise. Prominent thinkers — Plekhanov, Lavrov, and Tikhomirov — played more than a secondary role in the fate of the "Fund".

The author has traced the hitherto udocumented history of the "Fund", citing the charters, protocols and statutes, which were found in letters written to Lavrov and currently held in TsGAOR (Central State Archive of the October Revolution, Moscow, USSR). The author wishes to express his gratitude to Professor Boris Itenberg, of the Institute of History of the Soviet Academy of Sciences, for his assistance in making this study possible during the year 1980-81.